「十二人の派遣」（ルカによる福音書九章一～一〇節前半）

1　イエスと使徒たち

会堂でささげる礼拝は、今日から、九月一二日まで休止になります。休止は今年二回目です。

日曜日、主の日の礼拝が、教会のまさに生命線であることは、言うまでもありません。しかしそれを今はあえて休止し、社会の、新型コロナ感染症拡大との戦いに協力することが大切です。私どもは病気と死の力の脅かしに抵抗し、命の主に助けを祈りたいのです。

会堂の対面礼拝は休止ですが、どうぞ、それぞれ家庭にあって、聖書を開き、その説き明かしを聞き（読み）、そして祈る（主の祈り、など）、そうした礼拝を家でつづけてくださるようにお願いいたします。

いずれにしても、少し落ち着かない時がつづいています。説教も、今年後半に予定していた旧約の預言者エリヤの学びは断念し、ルカによる福音書の学びをさらに継続することにいたします。

さて今日は、そのルカ九章に入りますが、少しルカによる福音書全体を振り返っておきたいと思います。この福音書には、大体四つの大きな「まとまり（単元）」があります。イエスの誕生物語（一～二章）、イエスのガリラヤ伝道（三・一～九・五一）、エルサレムへと進んで行くイエス（九・五一～一九・二七）、そして最後にイエスの受難と復活（一九・二八～二四章）です。

この四つのまとまりのうち、一昨年から断続的に取り組み、私どもはすでに、イエスの誕生物語とイエスの受難と復活を学び終えています。今年に入って、ガリラヤ伝道を読んでいるところです。

今日から九章に入りますが、この九章には、イエスの生涯の大きな転換点が含まれています。今申し上げた、四つのまとまりのうちの、二つ目から三つ目への移り変わりが記されています。九章五一節です。

> イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた（九・五一）。

非常に重い言葉です。ガリラヤ伝道からエルサレムへ、十字架へ、それがここで始まります。

今日取り上げている箇所は、したがってイエスのガリラヤにおける伝道の、いずれにせよ、締め括りに当たるところです。そして、こうした状況の中で、改めて焦点が当てられるのが、弟子たちです。もちろん、これまでも、弟子は、陰に陽に顔を出していました。しかし彼らは、これまで、イエスのお供をするだけで、それ以上ではなかった。それがここに来て変化します。ただついて行くだけではなく、イエスと同じ働きを担う者として現れます。使徒として、特別に選ばれ、召された「十二人」とし

て現れるのです。

時々私が申し上げることですが、そのようなものとして、あるいは皆さんの耳に残っているかも知れません（そうであってほしい）が、イエスのガリラヤ伝道というような言い方をしますけれど、イエスはその働きを、はじめから、弟子たちなしに為そうとしなかったという事実です。ですから、とくにマルコによる福音書ははっきりしていますが（一・一四以下）、メシア（キリスト）として宣教を開始されて、イエスが最初にしたことは弟子を召し集めるということでした。当たり前のようで、じつはとても重要なことなのです。

イエスは、まもなくエルサレムへの途を歩もうとなさいます。ご自分の行く末を見通されます。ご自分の死、いずれにしても、地上の生涯の終わり、十字架を見すえて歩みはじめます。しかしこうして開始される神の国の宣教は、まさに神の国の到来のその日まで、続けられなければならないのです。将来の教会が、使徒によって担われるべき教会が、イエスの思いの中にあったと考えて、間違いありません。それゆえ弟子とは何か、使徒とは何かが、第九章で問われるのです。

2　ヘロデの戸惑い

使徒とは何か、いかに在るべきか、その問題に入る前に、今日の十二人の派遣の記事に、いわば挿入されているヘロデのことに触れておきたいと思います。挿入と申し上げましたが、ヘロデのことは、まさに、イエスによる使徒の派遣（二節）とイエスの元への帰還（一〇節）の間に、挟まれているのです。これはどう理解したらよいのでしょうか。

> ところで、領主ヘロデは、これらの出来事をすべて聞いて戸惑った。というのは、イエスについて、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言う人もいれば、「エリヤが現れたのだ」と言う人もいて、更に、「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」と言う人もいたからである。しかし、ヘロデは言った。「ヨハネなら、わたしが首をはねた。いったい、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主は」。そして、イエスに会ってみたいと思った（七～九節）。

ヘロデ、彼は、イエスの時代、ガリラヤおよびペレアを治めていた領主です。家系的にはユダヤ人ではなくエドム人です。ローマ総督ピラトとは良好な関係を保っていました。

他の福音書、マタイ（一四章）やマルコ（六章）を見ると、ここのところで、ヘロデの姦淫のこと、それを非難して囚われていた洗礼者ヨハネが、ヘロデの妻ヘロディアとその子サロメの要求によって斬首された次第が、詳しく伝えられています。しかしルカはそうしていません。

ルカが伝えているのは、領主ヘロデの「戸惑い」です。簡単に言えば、権力者の不安です。その原因は民衆の声、その動向でした。人々の「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言う声も、「エリヤが現れたのだ」と言う声も、「だれか昔の預言者

が生き返ったのだ」と言う声も、イエスの出現とその目覚ましい働きの中に、イスラエルの神の救いの到来、つまり、現世の審判が近い、そのことを民衆が嗅ぎ取っていることに不安をいだいたのです。ヘロデはあなたを殺そうとしているとイエスに伝えてくれたファリサイ派がいたほどです（一三・三二）。

しかしなぜ、ルカは、洗礼者ヨハネが殺された事件よりも、権力者ヘロデの不安をここで書いているのでしょうか。ヘロデのことを、使徒が宣教に派遣され、再びまたイエスのもとに戻ってくる中に、ルカが挿入したのは、使徒たちもまた、イエスと同じように、権力者のもとに立たされ、激しい迫害の中に置かれることにならざるをえないことを見て取っていたからです。使徒たちはイエスに遣わされて、まさにイエスのなさったことと同じことを行います。それはまた、イエスと同じ困難に置かれることも意味しているのです。そのことは、私ども教会にとっても同じことです（フィリピ一・二九他）。

3　呼び集め、遣わす

さてイエスに呼び集められた弟子たち、使徒たち、それがそのまま今日の教会と同じだというわけではありませんけれど、重要な点でつながっている、それは言うまでもありません。それを取り上げて、教会とは何か、託されている使命、それをどのように果たしていくのか、考えてみたいと思います。

イエスは十二人を呼び集め、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになった。そして、神の国を宣べ伝え、病人をいやすために遣わすにあたり、次のように言われた・・・（一～三節）。

何より、教会は、イエスがここで十二人を呼び集めたように、主イエスによって呼び集められた群れだということ、このことをしっかり考えておくことが大切であるように思います。

私ども教会員、一人一人違います。ほんとに違います。人間的に違っても、私どもは一つの群れとして歩んでいます。

どこに一つとなっている理由があるのでしょうか。人間的なものではないことは申し上げた通りです。私どもを結びつけている帯、紐帯は何でしょうか、それは、私どもがイエスによって呼び集められた、招かれたというところにあるのです。それ以外にはありません。

イエスによって呼び集められた、ということは、そこに神の御心が働いているということです。アウグスチヌスという昔のキリスト教の思想家の言葉に、人は、神がその気持ちを起こしてくださらなければ、決して神のところに来ることはないという意味の言葉があります。そもそも聖書にあります（ヨハネ六・四四）。教会に求道者の方もおられます。通りすがりに、あるいは旅行中の方もときに礼拝に来られます。自分の都合で、自分が選んで、自分の足で、ここに来たのだと考えます。でも、そうではない。私どもの、そのもともとの思いに神が働きかけてくださって、教会への途を

辿る決心を与え、そのことをなさしめていると思うのです。イエスが私どもを呼び集めてくださった。あの人も、この人も呼んでくださった、そこに私どもの群れの交わりの基礎があるのです。

今日の箇所には、よく分からないけれども、派遣された使徒たちの、宣教のやり方として、面白い言葉があります。三～五節です。ただ今日は、あえて取り上げないことにします。いま、神が、イエスによって招いてくださって、そこに教会が成立するというようことを申し上げましたが、それにつづく基本的なことを、申し上げたいと思います。

それは、それでは、何のために呼び集められたのかということです。教会は、この世に、遣わされるために、呼び集められるのです。教会は自己目的的にあるのではありません。自分たちだけで楽しんでいる教会は教会ではない。教会は、神の国の宣教のため、世に遣われます。神の国の宣教のためという言葉は、これまで何回も話してきましたので、申し上げることをしませんが、遣わされているというこのことを今日も思い起こしておきましょう。

今日の聖書箇所が、必ずしも触れていない、教会を考える上で、欠かすことのできない一つのことは、呼び集められた群れ、教会、それは、礼拝において形成されていくことです。

その意味でも、対面での会堂礼拝の休止は残念ですけれども、礼拝において、賛美し、御言葉に養われ、祈り、告白する、その中で教会がつくられていくことを忘れはなりません。

この礼拝において、私どもが主イエスを頭（かしら）とするキリストの体として形成されていくということです。ただこのことは、今日の箇所でははっきり言われていません。

もう一度、教会の派遣に戻ります。教会は、また私ども一人一人のキリスト者は主の証人として、世に遣わされています。家庭であったり、職場であったり、社会の只中であったり、いずれにせよ、私どもがその生活を許されているところで証人として歩むことを期待されています。イエスを主として歩んでいることが、明らかになるように歩むことが期待されています。

この期待に応える自信のある者は、だれもいないだろうと思います。期待されても困る。それに値しない自分だけは、だれに言われなくとも、自分でよく知っているのです。このような反省は、それ自身健全なことです。しかしそのような反省にとどまってしまえば、それは、必ずしも健全なものとは言えなくなります。値しないのにという自覚は、召し出され、遣わされることの恵みの自覚となることでなければならないのです。

今日の箇所、六節の言葉は、遣わされた使徒たちのはつらつとした姿を私どもに伝えています。「十二人は出かけて行き、町から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした」。教会は、呼び集められ、建て上げられ、そして宣教のために世に遣わされます。またイエスの元に（礼拝に）戻ります。その生き生きした循環とも言うべき出来事として、聖霊の出来事において存在します。その出来事の渦の中で私どもも生かされてまいりましょう。

（八月二九日）